

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第十七章）

我自身を善く律することと、
他を利益する慈愛心であるもの。
それが法であり、それは今生と他の生において、
諸果の種子である。 1

最高の仙が、諸業とは、
思と思已であると説かれた。
それらの業の差別は、
様相として多く、尽く掲げられた。(2・仏)

最高の仙が、諸業とは、
思と思已であると説かれた。
その業は我性の差別が、
多くの様相に尽く掲げられた。 2

最高の仙が、諸業とは、
思と思已であると説かれた。
それらの業の差別は、
多くの様相に尽く掲げられた。(2・顕)

そこで、「思である」と
説かれた業は、心意のものと主張する。
「思已である」と説かれた
業は、身体と言葉のものである。 3

そこで、「思である」と
説かれた業は、心意のものと主張する。
「思已である」と説かれた
業は、身体と言葉のものであると主張する。(顕)

言葉と、動作と、不捨の
不表というものと、
捨の不表と、
他もその如く主張する。 4

享受より起こった福德と、
福德でないものもその如くである。
思と、七つの法を
業であると顕かに主張する。 5

もし、熟す時まで
留まるならば、その業は恒常となる。
もし滅したならば、滅すとなったものが、
如何様に果を生じさせようか。 6

もし、熟す時まで
留まるならば、その業は恒常となる。
もし滅したならば、滅したものによって、
如何様に果が生じさせられようか。(仏・顕)

芽等の継続であるものは、
種子より顕現して起こる。
それより果が（起こる）。種子が、
無ければ、それも起こるとはならない。 7

何故ならば、種子より継続と、
継続より果が起こるとなり、
種子は果に先行する。
それ故に断滅ではなく、恒常ではない。 8

心の継続であるものは、
心より顕現して起こるとなる。
それより果が生じる。心を見よ。
無ければ、それも起こるとはならない。

何故ならば、心より継続が、
継続より果が起こるとなり、
業は果に先行する。
それ故に断滅ではなく、恒常ではない。

白い業の十の道は、
法を成就する方便であり、
法の果は、今生と他の生での
欲界の五様相の功德である

もし、その考察のようになれば、
多くの大きな過失となろう。
然れば、その考察は
ここでは合理とはならない。

諸仏や独覚や、
声聞方が説かれた
考察はここで合理となる。
それを良く述べよう。

借用証がそうであるように、
不失の業は借金 of 如くである。
それは界より四様相である。
それも本性は無記である。

捨て去ることによって捨て去られるのではなく、
修習されることによって捨て去られるものでもある。
それ故に、不失法によって、
業の果が生じさせられるとなる。

もし、捨て去ることによって捨て去られ、
業の移行によって壊れるとなれば、
そこでは、業が壊れる等の
諸々の過失の背理となる。

同界の業は、同部分と、
不同部分一切の
それが結生する時、
一つだけ生じるとなる。

心の継続であるものは、
思より顕現して起こるとなる。
それより果が生じる。思が、
無ければ、それも起こるとはならない。(9・仏)

何故ならば、思より継続が、
継続より果が起こるとなり、
業は果に先行する。
それ故に断滅ではなく、恒常ではない。(10・仏)

法を成就する諸方便は、
白い方向の十道であり、
法の果は、今生と他の生での
欲界の五様相の功德である。(11・仏)

もし、その恒常となれば、
多くの大きな過失となろう。
そう見るので、その恒常は
ここでは合理とはならない。(12・仏)

諸仏や独覚や、
声聞方が説かれた
恒常であるものはここで合理となる。
それを良く述べよう。(13・仏)

斯くも借金の借用証のように、
そのように業と不失法。
それは界より四様相である。
それも本性は無記である。(14・仏)

捨て去ることによって捨て去られるのでは
ない。修習されることによって捨て去られる
ものでもある。それ故に不失法によって、業
の果が生じさせられるとなる。(15・仏)

捨て去ることによって捨て去られるのでは
ない。修習することによって捨て去られるも
のでもある。それ故に不失法によって、業の
果が生じさせられるとなる。(15・顕)

もし、捨て去ることによって捨て去られ、
業の移行に合致するとすれば、
そこでは、業が壊れる等の
諸々の過失の背理となる。(16・仏)

今生において二様相の
全ての業と業のそれは、
別に生じることとなり、
異熟しても留まるのである。 18

それは果が移行することと、
死んだとなれば滅すとなる。
その分類は無漏と、
有漏であると知りたまえ。 19

空性と無量であることと、
輪廻は恒常ではない。
諸業は失われない法（現象）であると、
仏陀が示されたのである。 20

何故ならば、業は生じることがない。
このように本性が無い故に。
何故ならば、それは生じていない。
それ故に失うとはならない。 21

もし、業に本性が有れば、
恒常になると疑いは無い。
業は為したもものではなくなる。
恒常において行為は無い故である。 22

もし業を為していなければ、
為していないものとの遭遇を恐れることになる。
梵行に留まるのでない者も、
そこで過失となる背理となる。 23

まさしく一切の世俗名称とも、
反することに疑いは無い。
福德や罪悪を為すという
分類も合理とはならない。 24

それは異熟が熟したものが、
再々異熟するとなるだろう。
もし本性が有るならば、
何故ならば、業が留まる故に。 25

この業は煩惱の我性であり、
それらの煩惱は正しくあるのではない。
もし、煩惱が正しくなければ、
業が正しいとは如何様であるか。 26

今生において二様相の
業と業一切の、
それは、別に生じることになり、
異熟しても留まるのである。(18・仏)

今生において二様相の
一切は、業と業のそれが、
別に生じることとなり、
異熟しても留まるのである。(18・顕)

空性と断滅でないことと、
輪廻は恒常ではない。
諸業は失われない法（現象）であると、
仏陀が示されたのである。(20・仏)

空性と断滅が無いことと、
輪廻は恒常ではない。
諸業は失われない法（現象）であると、
仏陀が示されたのである。(20・顕)

何故ならば、業は生じることが無い。
何故ならば、事物そのものが無い故に。
何故ならば、それは生じていない。
それは、失うとはならない。(21・仏)

もし、業に事物そのものが有れば、
恒常になると疑いは無い。
業は為したもものではなくなる。
恒常において行為は無い故である。(22・仏)

それは異熟が熟すとなり、
再々異熟するとなるだろう。
もし、何故ならば業が留まる、
それ故に、自性が有る故に。(仏)

この業は煩惱の我性であり、
それらの煩惱は正しくあるのではない。
もし、煩惱が正しくなければ、
業はそれの、如何様に為したのか。(仏)

業と煩惱は、
諸々の身体の縁であると示された。
もし、業と煩惱は
それが欠如するなら、身体において如何様に述べようか。 27

無明によって覆われた、
欲望を具える者は享受者である。
それも行為者より他ではなく、
そのものであるそれでもない。 28

何故ならば、この業とは、
縁より起こったのではなく、
縁でないものより起こったことも有るのではない。
それ故に行為者も無い。 29

もし、業と行為者が無ければ、
業より生じた果は何処に有ろうか。
もし果が有るのでなければ、
享受者を見よ。何処に有ろうか。 30

斯くも、教示者が変化身を、
円満な神変によって変化し、
その変化身も変化を、
再び他に変化するように 31

斯くも、教示者による変化は、
円満な神変によって、
変化し、変化身も他を変化する。
その変化も他を変化するように、(仏)

その如く、その行為者が或る業を
為したことも、変化の様相の如くである。
例えば変化身が他の変化身を
変化なさるが如くである。 32

その如く、行為者が或る業を為し、
それも変化の様相の如く。
例えば変化身による他の変化が
変化をなさるが如くである。(仏)

諸々の煩惱や業や身体や、
行為者や果は、
尋香の都の如くや、
逃げ水や夢に似るのである。 33

「業を考察する」という第十七章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョコロ訳 (『ブッダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述。

(顛) は、パツァブ訳 (新訳) ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顛句論』で引用された偈を示す。